明治維新150年「フェリーさんふらわあ」で
2018年大河ドラマ「西郷どん」の舞台へ――。

幕末の維新の動乱期を彩った薩摩武士の郷里へ、いざ参らん

260年以上続いた江戸幕府が倒されたのは、1868年。数えて来年が150年にあたる。幕末動乱期を彩ったのは薩摩と長州の両藩。ともに関ケ原の合戦では西軍についた藩同士である。このうち薩摩は、名君・島津斉彬の登場により近代化を推進。これが幕府を倒す原動力になり、明治からの近代国家建設の礎となっている。維新150年を前に、鹿児島市内を旅した。町の所々には、西郷隆盛ら維新の巨人達の息吹が感じられる。

■城山公園展望台

城山は鹿児島市街地の中心にある108mの小高い山。明治10年(1877)に起きた薩摩武士達の反乱・西南戦争の舞台としても知られ、西郷隆盛ら薩摩軍と明治政府が最後に戦った舞台でもある。西郷洞窟や西郷隆盛終焉の地などそれにまつわる史跡もあるが、やはり圧巻は展望台から眺める鹿児島の風景。手前に街があり、海を挟んで桜島がある光景は、鹿児島観光を象徴する一枚だ。車ならすぐ登れるのだが、公園として整備されているので徒歩や自転車でも容易に登ることができる。桜島を望む絶好のポジションで、やはりここからの光景がベストだといえよう。

所 鹿児島市城山町
¥ 見学自由
<アクセス>
バス停城山から徒歩3分

ORIX Rent-A-Car

オリックス レンタカー

下船してすぐ借りられる!

志布志港さんふらわあカウンター

志布志港さんふらわあカウンターだから出来る、4つの便利!

1 志布志港からのご出発・志布志港にご返却ができます。
志布志港でレンタル → 志布志港で返却

2 九州エリア内の店舗(離島を除く)に乗り捨てができます。※大分港・別府港では返却できません。
志布志港でレンタル → ORIX Rent-A-Car 九州エリア他店舗(空港・駅など)で返却

3 他店舗(空港・駅など)で借りたレンタカーを港に乗り捨てができます。
ORIX Rent-A-Car 他店舗(空港・駅など)でレンタル → 志布志港で返却

4 空車があれば、当日予約なしでも貸出ができます。
当日OK♪

お問い合わせ

オリックスレンタカー志布志港さんふらわあカウンター 営業時間:9:00~17:00

【予約専用ダイヤル】
099-258-0388
営業時間:8:00~20:00

【オリックスレンタカー志布志港さんふらわあ受付カウンター】
志布志市志布志町志布志3292 志布志港フェリーターミナル内
099-472-2811

簡単ログイン!
http://www.carlease.co.jp

■反射炉跡

大砲を鋳造するために鉄を溶かした西洋式設備の跡。島津斉彬がオランダの書物を頼りにして造らせた。現在は基礎部分だけが残っている。奥の石積みがその跡で、右手にあるのは、かつての姿を縮小再現したもの。

仙巌園トリビア　右は猫神。島津義弘が朝鮮出兵時に7匹の猫を連れて行き、猫の目を時計代わりとした。そのことから時の神様として猫を祀っている。左は桜島の火山灰。民間事業者によって使い方はそれぞれだが、最終的には廃棄物処分場などで捨てられている。

■尚古集成館本館

1865年に建てられた機械工場跡を使って島津家の歴史と近代化事業を紹介している。建物自体は150年前のもので、現存する日本最古の洋式石造建築物である。外壁はレンガの代わりに溶結凝灰岩を用いており、人の手で削ったとは思えないほど水平に削って積み上げられている。この建物も世界遺産に登録されている。

■水力発電用ダム跡

島津忠義が造らせたもので水の落差によって発電を行い、それを御殿などの照明に利用した。

今も仙巌園に隣接する工場では薩摩切子づくりが行われている。薩摩切子は江戸切子と違って、より細かい細工や表面に色ガラスを厚くつけたものが多い。薩摩切子は欧州のカットグラスを模範にして色被せをボヘミアガラスや乾隆ガラスから学んだようだが、当時のものには日本的繊細さが出ていたといわれる。

仙巌園内には、奇岩・千尋巌や琉球国王から献上された楼閣・望嶽楼など見所がたっぷり。天下に聞こえた名庭園だけに景色がよく、島津斉彬や久光はここから花火を楽しんだという。明治になって島津久光が自分の思う世にならず、やけになって花火を上げたとの逸話があるが、それがここかどうかは定かではないようだ。

庭園美を愛でながら、

明治維新150年！ 動乱期の人物伝を伝える鹿児島のまち

日本の近代化について思う

■仙巌園

仙巌園は万治元年(1658)に島津光久が別邸として設けたもの。桜島を築山に、錦江湾を池に見立てた雄大な庭園である。15,000坪の庭園に、島津斉彬が集成館事業の拠点を造り、近代化への礎を築いた。園内の反射炉跡は、世界文化遺産にもなっている。桜島と錦江湾が一番美しく見えるという御殿は、維新後に島津忠義が住んでいた所で、彼が使用していた部屋や世継ぎのための部屋などが残っており、その頃の風情を伝えている。

所 鹿児島市吉野町9700-1
☎ 099-247-1551
時 8:30～17:30　休 無休
¥ 大人(高校生以上)1,000円、小中学生500円
御殿共通券は大人1,600円、小中学生800円
＜アクセス＞鹿児島中央駅から車で20分、まち巡りバス、カゴシマシティビュー「仙巌園前」下車すぐ

なぜ、薩摩が幕末・明治の原動力になったのか

幕末の主役は薩摩と長州で、この二藩が時代を回天させたといっても過言ではない。日本の南端にある薩摩藩がその主役となりえたのは独特の教育方法と財力、そして先の時代を見る眼にあった。25代島津重豪(しげひで)は閉鎖的だった藩政を改革し、藩校造士館や演武館を設立、〝蘭癖(らんぺき)〟(オランダかぶれ)と噂されるほど開化政策を取っている。ただ、豪奢な事業により財政は困窮を極め、500万両の負債、年間利子60万両という途方もない額を背負った。重豪がその財政を立て直すのに起用したのが茶坊主あがりの調所広郷(ずしょひろさと)である。調所が行ったのは、いわゆる借金の踏み倒し。250年の年賦返済で無利子償還という無茶な通達を商人に出している。調所はこうして借金を踏み倒しに近い形で一方的な発令を行うとともに、物産にも注力し、大坂の商人と協力して黒砂糖の専売強化を図ったり、琉球を通じて清(中国)とも貿易を盛んに行っている。当時は鎖国の時代で外国との交易は長崎に限られていたが、その補助的なものとして琉球を通じた貿易を認めていた。薩摩はそのルートを駆使しながらさらに「密貿易」も拡大しており、そのことにより多大な財力を手にしていたのだ。これが幕末の活動の原動力になったのは言うまでもない。

重豪のひ孫で藩主に就いた28代島津斉彬(なりあきら)は、名君と称され、松平春嶽、伊達宗城、山内容堂とともに幕末の四賢侯に挙げられる人物。斉彬は幕政にも提案を行い、老中・阿部正弘に幕政改革を提案。黒船来航以来の危機を打開するのは公武合体策しかないと主張した。藩政自体も改革し、富国強兵に努めて洋式造船、反射炉の建設、地雷・水雷・ガラス・ガス灯の製造などの集成館事業を興している。

集成館とは、磯の仙巌園にあるもので、日本初の工業地帯と考えてもらえればいい。斉彬は、欧米がアジア各国を植民地化していることに危機を募らせ、島津の別荘(仙巌園)のあった磯地区で紡績、大砲鋳造、造船といった近代化を進める事業を興したのだ。仙巌園の学芸員・岩川拓夫さんは「斉彬時代はこの地は別荘扱い。踊りや舞いを見たりして民衆との交流を図る場でした」と説明し、斉彬の偉業を教えてくれた。斉彬はまず竹林を開いて工場群を建設。この場所が海に面しており、海上輸送に適していたり、背後に山の急な斜面があるため、その利を用いて水車の動力が使えるといった好要因があったのがその建設理由だそう。これに加えて仙巌園はおもてなしの場として利用されていたので、来訪者に近代化工場群を見せる狙いもあったのだという。集成館事業により薩摩は急速な近代化に成功。このことに

幕末・維新の人物にふれる旅

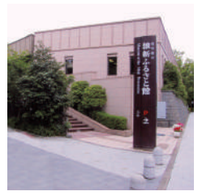
薩摩は今も燃えている!

■維新ふるさと館

鹿児島は幕末・維新の英雄を多く輩出した地である。記念碑や銅像は街中に多く見られるが、歴史観光の施設が少ない。そんな思いから平成8年(1996)に造られたのが加治屋町に建つ「維新ふるさと館」だ。同館では歴史を遊ぶをテーマにわかりやすく明治維新を解説。「幕末探訪・郷中教育コーナー」では、幕末期に主役となった下級武士の一日を再現。地域の先輩が後輩を指導する薩摩ならではの郷中教育を紹介。また、日の丸(日本の国旗)や君が代(国歌)が薩摩にルーツがあることなどを紹介した「世界を見ていた薩摩」や、西郷と大久保のエピソードを記した「薩摩エピソード」など展示が数多くある。特筆すべきは、地階にある「維新体感ホール」。ここでは「維新への道」と「薩摩スチューデント、西へ」を上演。西郷隆盛、大久保利通、勝海舟などの偉人のロボットが登場し、彼らによって維新史が語られる。基本的には薩摩史観によるもので「維新への道」は約25分。多彩な映像やロボットを使ってわかりやすく幕末から西南戦争までを描いており、基本知識がなくとも十分楽しめる内容になっている。

所 鹿児島市加治屋町23-1
☎ 099-239-7700
時 9:00~17:00(入場は16:30まで)
休 無休
¥ 大人300円、小人150円

<アクセス>
鹿児島中央駅から徒歩8分、カゴシマシティビュー 維新ふるさと館前下車すぐ、市電・高見橋下車徒歩3分



よっても幕末をリードできる雄藩の立場を得たのである。「様々な藩が幕末に富国強兵を掲げましたが、他藩は大砲を造るなど強兵目的が主で、本来の意味の富国へは踏み出せていなかったようです。ところが島津斉彬は豊かさを導く品にも着手。その一例が薩摩切子の工場です」と岩川さん。切子自体は長崎から伝わった外国のガラス製品をもとに江戸の職人を招いて島津斉興(斉彬の父)が始めていたものだが、斉彬が集成館事業の一環に加えることでさらに技術が進歩。やがて伝統工芸品となり、今の鹿児島物産品になったかと思うと、まさに先見の明があったといえる。紡績所の建設とて同じ。ここでの技術がやがて大阪の堺へ波及し、全国へと伝わる。これがひいては豊田佐吉の豊田式木製人力織機、無停止杼換式自動織機へ繋がり、その資金を得た豊田喜一郎が国産自動車を造って、トヨタの礎を成すと思うと、日本の工業大国の原点が斉彬の集成館事業にあったと考えてもおかしくはないのだ。

斉彬は下級城下士であった西郷隆盛らの才を見い出し、要職に就かせている。殊に隆盛への寵愛ぶりは凄く、隆盛も斉彬を師と仰ぐほど。幕末動乱期から維新にかけて隆盛は薩摩藩の若い連中の崇拝の的になっていくのだが、それとて斉彬が彼を可愛がって才があることを示したからで、若い武士達の斉彬への崇拝が隆盛への崇拝へと繋がっていったと思われる。

幕末にこの西郷隆盛や大久保利通、村田新八、大山巌など同じような地域の者が活躍するが、これは薩摩独自の郷中教育が影響している。郷中とは、青少年を稚児と二才(にせ)に分け、勉学・武芸・山坂達者(今でいうスポーツ)を通して先輩が後輩を指導する仕組み。このように区域ごとにこの手の教育がなされ、強固な絆が結ばれていたために同じ地域から幕末・明治の偉人が輩出された。ちなみに西郷宅があった加治屋町郷中は、前出の人物以外にも東郷平八郎や黒木為楨(ためもと)らを世に出し、近代日本の原動力の因を作っている。

所 鹿児島市
城山町7-2
¥ 見学自由
<アクセス>
カゴシマシティビュー西郷銅像前下車徒歩5分

■鶴丸城跡

江戸初期に島津忠恒によって築かれた平城で、屋形の形状が鶴が羽を広げたようだったことから鶴丸城と呼ばれた。何度も焼失、倒壊したが、明治7年(1874)に燃えてからは建物は再建されていない。今は石垣や堀が見られる程度。石垣には西南戦争時の弾痕跡が多く残っている。

■西郷洞窟

西南戦争の終盤、政府軍に追いつめられた薩摩軍が立て籠ったのが城山。西郷隆盛と私学校の面々がこの洞窟で最後の5日間を過ごしたと伝えられる。西郷隆盛は明治10年(1877)9月24日に洞窟を出て城山を下る途中で被弾。別府晋介の介錯で自刃した。

所 鹿児島市城山町19 ¥ 見学自由 <アクセス>鹿児島中央駅から車で10分

■西郷隆盛・従道誕生地

下級武士が住む加治屋町からは、維新の英傑が多く出た。西郷隆盛・従道兄弟もそう。「維新ふるさと館」そばには彼らが生まれた場所が残っている。この地は今では公園となっており、市民の憩いの場である。

所 鹿児島市加治屋町5-2
¥ 見学自由
<アクセス>
カゴシマシティビュー
維新ふるさと館前下車すぐ

■西郷隆盛銅像

記念写真スポットとしておなじみのもの。西郷隆盛の没後50年を記念して昭和12年(1937)に建てられた。東京・上野のものは高村光雲の作だが、こちらは安藤照が作っており、陸軍大将らしく軍服で凛々しく立っている。

所 鹿児島市城山町4-36
¥ 見学自由
<アクセス>カゴシマシティビュー
西郷銅像前下車すぐ

■西郷従道邸庭園跡庭石

西郷隆盛・従道生誕地がある公園の一角に見られるのが、かつて東京・目黒にあった従道邸の庭石。目黒区がその跡地を整備して公園にしたのでその時に鹿児島に移された。中央の大きな石が伊豆石で、下の左側が紀州の青石、右が伊予の石で構成されている。

所 鹿児島市加治屋町5-2
¥ 見学自由
<アクセス>カゴシマシティビュー
維新ふるさと館前下車すぐ

■大久保利通銅像

フロックコートをひるがえし、いかにも明治の偉人らしく立つ大久保利通の銅像は、氏の没後100年を記念して昭和54年(1979)に彫刻家・中村晋也の手によって作られたもの。像の足元には暗殺された時にいっしょに命を落とした馬車夫と馬の像が彫られている。

所 鹿児島市西千石町1
¥ 見学自由
<アクセス>市電・高見橋下車すぐ

■小松帯刀像

薩摩藩の高級官僚として西郷・大久保らとともに奔走したのが小松帯刀。幕末期は藩政の中心となり、薩長同盟締結時には家老として活躍。大政奉還の勧告者として知られている。像は平成5年(1993)、西俣敏弘の作である。

所 鹿児島市山下町5-3
¥ 見学自由
<アクセス>カゴシマシティビュー
西郷銅像前下車すぐ

街中のいたるところに維新の偉人たちの像が

調所広郷像 調所の像は天保山公園にある。本来武士は二本の刀を差しているが、この像は一本のみ。これは調所が島津重豪より財政改革を命じられたときに、切腹しないようにと脇差を取り上げられた話にちなんだもの。そのため銅像も一本しか刀を差していない。

五代友厚像 五代の像は大阪取引所前のものが有名だが、鹿児島の泉公園にもそれが建っている。この像は大阪の人が鹿児島市に寄贈したもの。それくらい五代は大阪の恩人として関西人から親しまれている。

若き薩摩の群像 JR鹿児島中央駅東口広場には、薩摩藩が英国へ派遣した留学一行の像が一。その中にはNHK朝ドラで人気を博した五代友厚や、初代文部大臣となった森有礼、日本初の近代紡績業を興した新納久脩の姿も見られる。

篤姫(天璋院)像 鹿児島県歴史資料センター前には、NHK大河ドラマの主役を果たした篤姫の銅像がある。この像は大河ドラマ「篤姫」放映にちなみ、平成22年(2010)に建立された。

西郷隆盛とは何者だったのか？

西郷隆盛と大久保利通は、幕末・維新の英傑で、この二人がいなければ明治という近代国家はやって来なかったであろう。西郷隆盛は、文政10年（１８２８）に鹿児島城下の加治屋町で生を受けた。下級武士の子で、当初は郡方書役助をしていたが、島津斉彬が藩主になると、その才を買われ、江戸出立の庭方役に加えられている。斉彬は次期将軍に一橋（徳川）慶喜を推しており、西郷隆盛はその調整工作をしながら色んな人物と繋がったようだ。その一人が僧・月照。彼を伴って薩摩入りするのだが、斉彬の死後、保守化していた藩は保護せず、西郷隆盛は月照とともに錦江湾に身を投じ自殺を図っている。幸い一死はとりとめたが、奄美大島へ島送りになった。

西郷隆盛は、その生涯で二度の島送りになっているのだが、薩英戦争を経験して混乱した薩摩にはどうしても彼が必要で、盟友・大久保らの働きかけもあって幕末動乱期に復帰。その後、歴史に名を残すほどの活動を果たすのだ。

斉彬政権下で東奔西走したり、勝海舟などの有力人物と知己を得たりしていたのでそれまでも全くの無名ではなかったが、戦でさらに名を高めた。西郷隆盛の初陣と呼ばれるのは38歳になってから（動乱期でも戦争はないので仕方のないことだが）。禁門の変（蛤御門の変）がその舞台である。これは文久３年８月18日の政変で京を追われた長州勢が奪回を図るべく、攻め入った事件である。ここで西郷隆盛は洋式銃隊を率いて指揮を取り、苦戦する会津・桑名両藩を助けて長州勢を撃退している。この働きにより京に駐在していた大名家の藩士にその名が轟いたという。

今でこそ坂本龍馬が幕末期の人気No.1人物といわれているが、司馬遼太郎が「竜馬がゆく」を上梓するまでは、マイナーな人物だった。現に司馬は龍馬をモデルに小説を書くと決めた時、知人から「なぜそんなマイナーな人物を主役にするのか」と問われている。ところが同書がベストセラーとなり、内容も面白かったのでその人気は鰻登りになっていき、幕末第一級の英傑と思われるに至った。それまでは西郷隆盛がそのポストに座っており、彼を模した貯金箱や彼を絡めた商品が巷に溢れていた。

しかし、考えてみればそれとて変である。西郷隆盛は明治10年（１８７７）に西南戦争で明治政府に反旗を翻しており、いわば反乱者。それがいつのまにかその汚名をそそがれ、没後12年の明治22年（１８８９）には正三位を贈られているのだ。

西郷隆盛という人は、色んな意味で風変わりな人物だ。まず、我々が呼んでいる〝隆盛〟という名は彼の真の名前ではない。彼は51年の生涯において13もの名前を使いわけている。西郷家の嫡男として生まれた時は小吉と呼ばれ、元服すると吉之助、もしくは隆永である。流刑になって菊池源吾と変名し、帰国後、大島姓を名乗ったのは例外として、大半は西郷吉之助というのが多い。昔は今と違って諱（いみな）や呼び名などがあった。西郷のそれは、名乗りは隆永で、通称が吉之助だった。明治になって新政府に名前を届ける際に吉井友実が間違えた。吉井は西郷の名乗りを忘れてしまい、「確か、隆盛だったか」と登録してしまったのだ。実は〝隆盛〟は西郷の父・吉兵衛の名乗りで、正式には〝隆永〟である。その登録名を聞いても西郷吉之助は「おいは隆盛でごわすか」と平然としており、訂正に行かなかったそうだ。ちなみに西郷隆盛の弟・従道（つぐみち）にも同じような話がある。西郷家は代々〝隆〟の字を名前につける。当然ながら隆盛の弟・慎吾（これは通称）にも付いており、正式には隆道（たかみち）という。

ところが名乗りを聞きに来た明治政府の役人が聞こえにくかったのか、慎吾が字を説明しようと「リュウドウ」と言ったのを聞き間違えて「ジュウドウ」としたので、歴史では隆盛の弟は〝西郷従道〟と呼ばれている。慎吾も訂正しに行っておらず、あっけらかんとしていた。そんな大らかさがこの兄弟にはある。

もう一つ、不可思議な話を書いておく。それは、今の世に伝わる西郷隆盛の肖像画が正確には本人のものではないという話。幕末期に写真技術が日本に入ってきたおかげで多くの偉人達の顔を知ることができる。有名なのは坂本龍馬の写真。数枚ある中で知られているのは慶応３年（１８６７）に長崎の上野彦馬か、その弟子・井上俊三が撮ったとされる一枚だ。このように新しい技術を面白がって色んな人物がその姿を残している。だが、西郷隆盛には一枚も写真がない。顔を晒してしまうと命を狙われるから嫌ったとの説もあるが、単なる写真嫌いだったのではないだろうか。

我々が西郷隆盛と崇めている肖像画は、明治11年（１８７８）にイタリア人の銅版画家・キヨッソーネが描いたもの。当然ながらキヨッソーネは、西郷隆盛と面識がなく、弟の従道といとこの大山巌を参考にして描いている。これが意外と似ているとの証言もあったためにこの肖像画がよく使われているのだ。上野公園に建つ西郷隆盛像は、高村光雲の作。大日本帝国憲法発布に伴う大赦で西郷隆盛＝逆徒の汚名が解かれたのをきっかけに吉井友実ら薩摩出身者が計画してできたもの。鋳造者の岡崎雪馨はキヨッソーネのコンテ画をもとに西郷の知り合いなどに聞き、制作を進めたらしい。ところが公開に招かれた西郷の夫人・糸子は「うちの主人は、こんなんじゃなかった」と発し、ラフなスタイルで犬を連れている姿を見て「浴衣姿で散歩なんてしない」と周囲の人に語ったと伝えられている。西郷隆盛の写真とされるものが世に出回り、一時は土産物として売られていた時代もあるにはあった。これとて偽物で、今ではそれが永山弥一郎の写真だとわかっている。昭和37年（１９６２）に大塚安子が俗にいう〝群像写真〟を取り挙げ、その中の一人が西郷隆盛だと発表したが、これも聞きとりによって小田原瑞哉ではとしている向きもある。このように今の世でも論争が絶えないのも彼が英傑たる所以だろう。

西郷隆盛人気は、やはり彼の人柄による所が大きい。彼の人物的魅力を示すものとしてこんな話がある。西南戦争では臼杵（大分）の士族も戦に加わっている。薩摩軍の敗戦が濃くなった時、臼杵の老人が遣いをやり、「鹿児島県人ではないから帰ってこい」と諭した。一同が帰る中で隊長のみは残って西郷隆盛といっしょに死ぬと言い出した。「いっしょに帰ろう」と誘う中で彼が言うのは、「お前達は隊士だから交わりが少ないが、私は接することが多かったからか彼の魅力の虜になってしまっている」との理由。だから共に死ぬしかないと帰国を断ったそう。その言葉通り、臼杵士族の隊長は城山で亡くなっている。こういった魅力を薩摩の人達は肌で感じていたと思われる。だから城山での自刃以降も西郷隆盛を伝説の英雄として持ち上げたのだ。今、坂本龍馬が人気No.1となっているのとは、少々理由づけが違うように思えてならない。

（文／ジャーナリスト・曽我和弘）